

## 5.3.1. 一般規則

## 5.3.1.1. ラジオ・コントロール・グライダーの定義

推進装置を持たず、固定された翼面（すなわち回転または、はばたきによらない翼）に作用する空気力学的力によって、揚力を生じさせる模型航空機。幾何学的形状あるいは面積が可変の模型にあつては、最小または最大の位置に展開した状態において下記の諸元内になければならない。模型は、地上にいるパイロットによって、無線制御にて操縦されなければならない。幾何学的形状および面積の変化は、すべて無線によって遠隔制御されなければならない。

## 5.3.1.2. 模型の事前製作に関して

B.3.1 a) of Section 4B（模型の製作者）の規定は、F 3 Bには適用されない。

## 5.3.1.3. ラジオ・コントロール・グライダーの特性

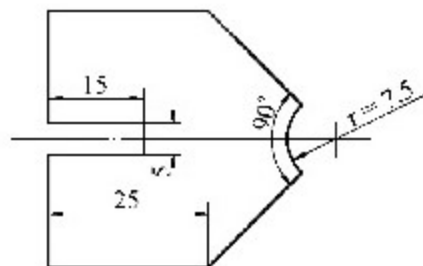
## a) 一般特性

最大翼面積：  $150d \text{ m}^2$

最大飛行重量：  $5\text{kg}$

St に対する荷重：  $\leq 75\text{g/d m}^2$

胴体先端の最小半径：  $7.5\text{mm}$



TEMPLATE FOR NOSE RADIUS, TOW HOOK AND MARKING

- b) 着陸時に地上を滑走する模型の動きを抑えるための、固定式あるいは引き込み式の着陸拘束装置（例えばボルト、鋸歯状の突起物など）の使用は許されない。  
模型の下面には、曳航フックと翼面コントロール・リンケージ以外の突起があつてはならない。曳航フックは、正面から見たときの幅5mm以内、高さ15mm以内でなければならない。
- c) 無線機は、50MHz以下の場合10kHz 間隔で他の装置と同時使用が可能でなければならない、50MHz以上の場合20MHz 間隔。
- d) 模型からパイロットに情報を伝達するいかなる装置も禁止する、但し受信機の受信状況及びバッテリー電圧を除く。競技中の競技者、助手、チームマネージャーは、全ての通信装置（トランシーバ、電話を含めて）の使用を禁止する。

- e) 競技者は競技会で3機の模型を使用することができる。交換可能な全ての部位（主翼、胴体、尾翼）はユニークにマークされていないといけない。マークのない部位との交換利用はできない。
- f) 競技者は、競技会の間、[3機の] 模型の部品を組み合わせて使用することができるがその結果として飛行に供する模型は、規定に合致していなければならず、またすべての部品は競技の開始前に承認されたものでなければならない。 5.3.2.1 参照。
- g) 連続するラウンドごとに無作為に発航順を決めるため、各競技者は、3つの異なる周波数を登録しなければならない。競技者は、競技会の間、これら3つの周波数のいずれかの使用を要求される。なお、この要求はラウンドの開始前少なくとも30分前までに、当該選手のチーム・マネージャーに対する書面でなされるものとする。

#### 5.3.1.4. 競技者と助手

競技者（パイロット）は無線装置を自分だけで操作しなければならない。各パイロットはウインチラインにチーム・マネージャーを含む3人の助手を持つことを許される。ただし、助手は、タスクBおよびCの際に、B面付近から、ターンのためのいかなる合図（シグナル）も与えてはならない。最大他に2名の助手を、風向きをカバーのためリターン位置にのみ配置できる。

#### 5.3.1.5. アテンプトと公式飛行の定義

- a) それぞれのタスクにおいて（5.3.2.1 参照）、競技者は自分に与えられた作業時間の間に、何回でもアテンプトを行う権利を与えられる。1回のアテンプトは、緊張した曳航索に取りつけられた模型が、競技者あるいは助手の手を離れた瞬間に開始される。最初のアテンプトが開始された後は、模型を交換すること、および部品を変更することは許されない。
- b) 以下の状況のいずれかが発生し、かつその状況が競技会の審判によって正式に認められた場合は、当該競技者には新たに作業時間（リフライト）が与えられる。
  - i) 飛行中の当該競技者の模型が、飛行中あるいは発航中（飛行に向けて、競技者あるいは助手の手を離れた状態）の他の模型と接触した場合、あるいは曳航中の、他機の曳航索に接触した場合。ただし、この後も飛行が正常に行われた場合は、競技者が公式飛行として認めたとする、もし作業時間終了後にリフライトを要求しても要求は認められない。
  - ii) 曳航中の当該競技者の模型あるいは曳航索が、発航中（飛行に向けて、競技者あるいは助手の手を離れた状態）の他の模型あるいは曳航索に接触した場合、あるいは飛行中の他の模型に接触した場合。ただし、この後も飛行が正常に行われた場合は、競技者が公式飛行として認めたとする、もし作業時間終了後にリフライトを要求しても要求は認められない。
  - iii) 当該競技者の曳航索が、発航した時点（飛行に向けて、競技者あるいは助手の手から離れた状態）で他の競技者の曳航索に交差され、あるいは絡みつかれた場合。

- iv) 審判あるいは計時係の過失により、その飛行が審査されなかった場合。
- v) 競技者の管理できる範囲外で、予測不能の事態によって飛行が妨害あるいは中断された場合。
- c) 上記のいずれの場合にても、競技者はこれらの事態が発生した飛行を公式飛行に意思表示できる。これらの事態が発生したとき、競技者が発航を継続するか、あるいは障害が除去された後に再発航（リランチ）を行った場合は、新たな作業時間を要求する権利を放棄したものと判断される点に注意。
- d) 競技者が新たな作業時間を獲得したものの、すでに当該競技者の模型がこの新たな作業時間内に修理不可能な損傷を受けている場合は、5.3.2.1.規定にかかわらず、該当ラウンドを予備機で飛行する権利を認められる。この規定は、当該模型に与えられた損傷が、再飛行の権利を与えられるに至った事故に直接直接起因する場合にのみ、適用される。
- e) 追加アテンプトが、当該ラウンドのタスクA（滞空）あるいはタスクB（距離）でなされる場合、パイロットは追加アテンプトを、規定の人数を満たしていない他のグループ [その時点でまだ飛行していないグループ] あるいは新たに構成されたひとつあるいは複数のグループ中で実施する権利が与えられる。無線周波数の競合から以上の措置がとられない場合は、当該競技者は、本来の、事故が生じたときのグループで再飛行する権利が与えられる。この場合、再アテンプトを認められた競技者については2回目の結果が公式得点とされる。他の競技者に関しては、2回の結果のうち、良い方が公式得点とされる。

#### 5.3.1.6. 公式飛行の定義。

公式飛行は、作業時間内の最後のフライトとなる。

#### 5.3.1.7. 飛行の無効あるいは失格

- a) 規定に対する違反が生じた場合、当該飛行は無効となる。ただし、特別に規定の変更が指示されている場合は、この限りではない。意図的な違反、あるいははなはだしい違反があった場合には、コンテストディレクターの判断により、当該競技者は失格とされる場合がある。
- b) 曳航時あるいは飛行中に模型の1部が脱落した場合、100点減点される。なお、この条項は、他の機体との衝突または着陸時の地面への接触により模型の一部が脱落した場合には適用されない。100点の減点は、各ラウンド毎に記録され最終スコアから減点される。
- c) 競技者以外の者によって飛行中の模型が操縦された場合、当該競技者は失格となる。
- d) タスクAにおいて、着陸操作中に模型が操縦者あるいは助手に接触した場合、着陸点は与えられない。
- e) リターンプーリは、地面に安全に固定されないといけない。抜けたり一部が地面から離れた場合1000点ペナルティーが課される。ラウンド毎に記録され 合計からマイナス

する。

f) ウインチは、地面に安全に固定されていないといけない。ウインチが地面から抜けたり回転部分の一部の部品（ラインを除いて）が外れた場合、1000点ペナルティー。

ラウンド毎に記録され、合計からマイナスする。

#### 5.3.1.8. スタートの編成

a) 競技者は、可能な限り多数の同時飛行ができるように、使用する周波数にしたがって、抽選によりグループ分けされなければならない。この抽選は、極力、同一の国の競技者が同一のグループに含まれないように編成されなければならない。

b) 競技者の組み合わせを変化させるために、グループの構成はラウンドごとに変更されなければならない。滞空競技（タスクA）に対しては、1グループに最少5名、距離競技（タスクB）に対しては、1グループに最少3名、速度競技（タスクC）に対しては、ひとつのグループに最少8名あるいは全競技者が含まれなければならない。

タスクCの飛行順は、それまでの得点合計の逆順が望ましい。最初のラウンドのタスクCのみいつもタスクAの順に固定される、それ以後のタスクCについて主催者の判断でタスクAの順も選択できる。

c) グループ編成後、ただひとりの競技者がのみ有効な結果の場合、そのグループの結果は無効とされる。この場合、当該グループは再飛行を実施し、その結果が公式成績とされる。

d) グループ間の飛行順もまた、抽選で決定される。各ラウンドにおいて、グループのスタート順は異ならなければならない。

e) スタート係が作業時間の計時開始を宣言する前に、競技者には5分間の準備時間が与えられる。

#### 5.3.1.9. 競技会の運営

a) 送信機と周波数の管理については、Section 4B, para B.10 (B.11?) 参照のこと。

b) 競技役員は、5.3.1.8.による準備時間の開始時にのみ、競技者に送信機を引き渡す。

c) 計測装置、ウインチあるいは障害物となる器具はすべて、A面とB面の間に、タスクCのための安全面から最少5メートル離れた位置に設置しなければならない。

タスクCにおいて安全面の観測に用いる装置は、A面、B面から最少5メートル離れた安全面の外側に設置しなければならない。

d) コンテストディレクターは遅滞なく競技者及びチームマネージャーに判定、ペナルティなどの判断を告げなければいけない。

#### 5.3.1.10. 安全規定

a) 主催者は着陸エリアと他の作業のためのエリア(セーフティ・エリア)の境界を明確に示さなければならない。

b) 5.3.1.5 節 b) の第1、2、3、5 項に記述された状況と発航瞬間のライン切れを除き、パイロットあるいは助手の手を離れた模型が、セーフティ・エリア内のなんらかの物体(地面、自動車、棒、植物、索など)に接触した場合300点が課される。セーフティ・エリア内に

いる人物に接触した場合は、ペナルティー1000点与えられる。1回の飛行中における接触の回数は問われない(1回の飛行につき、最大1ペナルティ)。このペナルティーは最終得点から300点または1000点を減ずる。また、このペナルティーは、接触が発生したラウンドの得点表に記載されなければならない。

### 5.3.2. マルチタスク競技会のための規定

#### 5.3.2.1. 定義

- a) この競技は、ラジオ・コントロール・グライダーのマルチ・タスク競技で、以下の3種のタスクが含まれる。
  - A) 滞空
  - B) 距離
  - C) 速度
- b) タスクA、B、Cを組み合わせて、ひとつのラウンドが構成され、最小、2ラウンドが実施されなければならない。世界選手権及びコンチネンタルチャンピオンシップの最終ラウンドのみ、一部のみタスクでもラウンドが成立する。世界選手権の場合、各選手は規定e B. 13, Section 4B. (B. 14)を条件として、最少5ラウンドを飛行する権利があたえられる。主催者の判断によって、ラウンドはどのタスクから開始してもよい。
- c) ひとつのラウンドは、同一の模型で飛行させなければならない、部品の交換は認められない。ただしバラストの追加(模型の内部に取りつけられねばならず、バラストを搭載した状態での模型は規定5.3.1.3.に適合しなければならない)と、取付角の変更のどちらか、またはこの両方だけは認められる。
- d) 離れた位置から、無線制御によって外形寸法あるいは面積を変化させることは許される

#### 5.3.2.2. 発航

- a) すべての発航は、主催者により、風に向かって発航できるように考慮して指定された区域内で行わなければならない。特に指示がないかぎり、すべての発航は主催者あるいは、コンテストディレクターの承認を得た電動ウインチによって行わなければならない。
- b) ウインチから200m以内の風上側に折り返し器具を設けなければならない。折り返しプーリーの軸の地上高は0.5mを超過してはならない。模型の発航はウインチからおおよそ3m以内のところで行わなければならない。曳航中のリールの逆転を防止するために、自動逆転防止装置を備えなければならない。
- c) ウインチには、1個の量産型スターター・モーターが取り付けられねばならない。モーター端のベアリング(改造)は、許される。ドラムはモータ直結又は固定ギヤ比のギヤを介して回転させられる。他の変更は後の項番B. 18. 1に従う。ドラム径は、固定でないといけない。
- d) パワーソースは、12Vの鉛バッテリーが使われる。ウインチバッテリーのコールドクランキング容量は、以下の基準(どれか)に従う。

300 amperes max. according to DIN 43539-02 (30s/9V at -18 OC).

355 amperes max. according to IEC/CEI 95-1 (60s/8,4V at -18 OC).

500 amperes max. according to SAE J537, 30s Test (30s/7,2V at 0 OF).

510 amperes max. according to EN 60095-1 (10s/7.5V at -18 OC).

上記基準と同等と証明されれば、上記以外の基準でも認める。

- e) バッテリーからウインチモータへは、マグネットまたは機械的SWで供給されなければいけない。そのほかの電子機器の使用は認められない。競技者は、ウインチのいかなる部品交換も認められる（ウインチ検査、規定に抵触しない場合）
- f) ウインチラインでの充電禁止。モータ冷却、バッテリーの過熱禁止。
- g) 規定の目的は、ランチのパワーを制限する。従って一個のバッテリー以外、策の伸び縮と少しのドラム慣性のみで、他のフライホイール、スプリング、錘、空圧機器などの使用を禁止する。
- h) ウインチの全体抵抗（バッテリー、モータ、ケーブル、スイッチ）は、23ミリオーム以上。バッテリーとモータ間の抵抗は、固定され容易に変更できない構造であること。
- i) バッテリーの端子は、電圧測定のためのクリップで簡単に接続可能で、どちらかのケーブルは、クランプメータで容易に計測が可能なこと。
- j) 測定：連続して測定、ランチ直後、前回の測定から最低2分間バッテリーを使用しない間隔を空ける。全体抵抗は、直前の電圧と、スイッチを入れた後300ミリセカンド（±30ミリセカンド）後の電流値で計算する。この300ミリセカンド後モータは停止していること。
- k) テストで使用する電圧計の精度は1%以下。300ミリセカンド後の電圧を測定する。クランプ電流計は、0-600Aまたは0-1000A 範囲測定可能で制度は2%以下または計算抵抗0.1ミリΩ、0.5%以下を使用。  
抵抗値の計算式は
- $$\text{Measurement with clamp transducer } R_{\text{tot}} = 1000 \times U_b / I_{300}$$
- $$\text{Measurement with shunt } R_{\text{tot}} = (1000 \times U_b / I_{300}) - 0.1$$
- ( $R_{\text{tot}}$  in milliohms,  $U_b$  in volts,  $I_{300}$  in amperes)
- L) 最初の測定は、測定設備の正しい機能をチェックするために取られて、捨てられます。前のテストかランチの少なくとも2分以上の間隔で3回連続して測定をするべきです。ウインチの全体抵抗はこれらの3回測定のそれぞれの結果の平均です。人手で全体抵抗について計算できるように電圧と電流を表示しなければなりません。自動的に全抵抗について計算するならば、同時に、電圧と電量値を表示さなければなりません。
- ウインチは規則に従って全抵抗が少なくとも23m以上であれば承認される。
- m) 300ミリセカンド時のバッテリー電圧は、9V以上でないといけない。競技中の測定時は、この規定を適用しない。

- n) 主催者は、少なくとも2人の処理職員か0.5%の寛容の中で再現可能な結果を生むと立証された数個の測定装置を任命しなければなりません。(その職員は、単一の測定装置でウインチ測定するでしょう)。
- o) バッテリー接続は、緊急時に工具無で外される機構でないといけない。  
(slotted pole shoes) 溝付き端子を両端に使用の場合、全てに溝がないといけない。
- p) ウインチ規則に従っていない場合、飛行は1000点ペナルティーが課せられます。  
テスト以前の飛行全てに減点が課せられます。1000ポイントの最終得点からの減点であり、テスト以前のラウンド毎全て(チーム)に追記されます。
- q) 離脱後ラインは速やかにリターンプリーまで、巻き取られないといけない。この間、ラインは助手がガイドして、他競技者のラインを痛めないようにしないといけない。ラインは測定された長さで止まるか、または、リングなどのストッパーにて、リターンプリーから抜け落ちないようにしないといけない。ラインは、ウインチまでは人が引いて戻さなければならない。ラインが地上にあるとき、他のラインに乗っている場合、他曳航中のラインに触れてる場合ウインチを巻いてはいけない。
- r) ラインは(リンケージ以外の非金属の材料でできているに違いない)は5dm<sup>2</sup>の最小面積を持っているペナントを備えなければなりません。模型飛行機に付けられていなくて、ケーブルのリリースまで不活発なままで残っているなら、パラシュート(5dm<sup>2</sup>最小面積)をペナントに代用するかもしれません。ウインチから完全な巻き戻しの間、パラシュート使用するなら、取り外すか機能しない様にする。
- s) コンチネンタルと世界選手権の場合では、競技の間、最大6個のウインチと6個のバッテリーが完全なチーム(3人のパイロット)によっても使用されます。  
ウインチ、バッテリーの交換(共用)は、チーム内で規定を守る責任があります。  
(違反発生時チーム全員の責任)

### 5.3.2.3 タスク A —— 滞空

- a) このタスクは、スタート係りの指示から12分以内に完了しなければならない。  
この時間には、曳航時間も含まれる。
- b) 模型が自由飛行を開始してから停止するまでの完全1秒に対して1点が与えられ、最大600点(すなわち最大10分間)まで与えられる。各完全1秒は、作業時間の範囲内でなければならない。したがって、作業時間を超過した飛行時間には得点は与えられない。飛行は、模型が曳航索を離脱したときから始まる。
- c) 600秒(10分)を超過した飛行に対しては、完全1秒につき1点が減じられる。
- d) 着陸に際しては、主催者によって定められた指定点からの距離に応じて、以下の表にしたがって追加点が与えられる。

指定点からの距離 (m)	得点	指定点からの距離 (m)	得点
1m	100	9m	60

2m.....	95	10m.....	55
3m.....	90	11m.....	50
4m.....	85	12m.....	45
5m.....	80	13m.....	40
6m.....	75	14m.....	35
7m.....	70	15m.....	30
8m.....	65	15m以上 .....	0

この距離は、停止した模型の機首先端から指定点（半径15mの円の中心）までの距離を測定する。

着陸の質「なめらかな着陸か、荒い着陸か、など」については得点は与えられない。飛行時間が 630 秒（10分30秒）」を越えた場合は、着陸追加点は与えられない。

測定された距離は、メートル単位で切り上げる。

- e) 12分の作業時間が完了した瞬間に、依然として模型が空中にある場合は、その瞬間までの飛行時間のみが得点の対象となり、指定点着陸のための追加得点は一切与えられない。
- f) 得点の高いものから低いものへの順位並び変えられた得点表にもとづいて、部分得点Aが計算される。 5.3.2.6.参照。

#### 5.3.2.4. タスク B —— 距離（競技場配置図参照）

- a) このタスクは、スタート係りの指示から7分以内に完了しなければならない。この時間には、曳航時間も含まれる。アテンプトは、グライダーが曳航索を離脱した後に開始される。
- b) 滑空飛行中の模型が、基線Bに向かって、最初に基線A（仮想垂直面）を通過した瞬間に最大4分間の実質飛行時間が始まる。この4分間内に、模型はA面からB面へのラップ、およびその逆方向のラップを可能な限り数多く達成しなければならない。
- c) 模型がA面を通過したときには、審査員（あるいは音響システム）が、通過を宣言し、模型がB面（仮想垂直面）を通過したときには、フラッグ・マン（あるいは音響システム）が通過を知らせる信号を発する。信号が発せられない場合は、模型が適正に基線を通過しなかったことを示す。垂直面の通過を調べる器具は、これらの垂直面が平行であることを保障しなければならない。通過の合図または計時は、模型のどの部分でも基線を通過した瞬間に行われなければならない。オーディオビジュアルシステムを使う場合音がなくてもランプが付けば有効である。
- d) コンテストディレクター又はフライトラインマネージャーは、曳航中の飛行機をA・B面ジャッジに明確に指定しなければいけない。その為にパイロット又は彼の助手は、割当てられた信号（アルファ、ブラボー、チャーリー、エコー、フォックストロート）で明確に要求しないとイケない。コンテストディレクター又はフライトラインマネージャーから曳航許可を得た後、速やかスタートしなければならない、なぜならば、次の



競技者が曳航許可を得る可能性があるから。許可を受けずにスタートした場合、速やかに着陸後再度、スタート要求から再開が必要。競技者は4分間の計時飛行中は基線Aから、どちらかの側の10m以内の地点にとどまらなければならない。

- e) 模型が4分間の飛行時間内に着陸した場合は、完走した150mラップのみがカウントされる。4分間の飛行時間、あるいは7分間の作業時間が経過した後も模型が空中にある場合、いずれかの時間が先に完了した瞬間における、完走したラップのみがカウントされる。
- f) 競技終了後、主催者の決めたセーフティーエリア外の指定された着陸エリア外に着陸した場合、100点ペナルティーが課せられ、合計点数からマイナスされる。
- g) 飛行時間内に飛行した全ラップ数の多いものから少ないものへの順に並べ変えられた得点表にもとづいて、5.3.2.6にしたがって算出された得点が「部分得点B」となる。

#### 5.3.2.5. タスクC —— 速度 (図参照)

- a) このタスクは、スタート係りの指示から4分以内に完了しなければならない。この時間には、曳航時間も含まれる、トライアルは、グライダーが曳航索を離脱した後に開始される。曳航フックの離脱後、模型は1分以内に基線Aからタスクを開始しなければならない。もし、模型が基線Aから基線Bに向かって、最初に基線Aを通過する前に1分間が経過した場合には、模型を着陸させ、当初の作業時間内に再発航しなければならない。
- b) このタスクは、基線Aから出発して基線Bの方向へ、またその逆方向へ、4ラップの距離を最小時間で飛行することから成り立つ。
- c) 飛行時間は、少なくとも小数点以下2桁まで求められた秒数で記録される。この飛行時間は、滑空中の模型が最初に基線Aを通過してから150mのコースを4ラップ完了するまでを計測する。
- d) 模型が基線（仮想垂直面）を通過したときには、フラッグマン（あるいは音響システム）が、通過を宣言する。信号が発せられない場合は、模型が適正に基線を通り過ぎなかったことを示す。垂直面の通過を調べる器具は、これらの垂直面が平行であることを保障しなければならない。通過の合図あるいは旋回は、模型の一部が基線を通り過ぎた瞬間に行われなければならない。音響機器は、A、面安全地帯から30メートル以内に設置しないといけない。
- e) パイロットは、計時飛行中は基線Aから、どちらかの側の10m以内の地点にとどまらねばならない。
- f) タスクを完了した後は、セーフティーエリア外的主催者が決めた場所に着陸しないとペナルティー100点が課せられ合計得点からマイナスされる。
- g) 模型がタスクを完了する前に停止した場合、0点が与えられる。
- h) タスクCの間、計時飛行は安全面の片側で行われなければならない、このとき、全審判と計時係は安全面の反対側にとどまらねばならない。主催者は、安全面のどちら側を飛行

するか、太陽の方向などを考慮して指定しなければならない。光学的補助手段によって、いかなる部分であっても、模型の一部が安全面を越えたと認められる場合は、当該飛行は300点のペナルティーが課され、最終スコアから減点される。減点は、ラウンド毎スコアシートに記載されます。

- i) 曳航フックの離脱後、模型が基線Aから基線Bに向かって最初に基線Aを通過してからは、それ以上のアテンプトは認められない。ただし、基線Aを通過する以前に、競技者が再発航の意志を表明した場合は、この限りではない。
- j) 150mを4ラップ完了した時間を短いものから長いものへ並べ替え、5.3.2.5.にもとづいて算出された得点が「部分得点C」となる。

#### 5.3.2.6. 部分得点

- a) 各タスクにおいて、各グループの勝者には 1000 点を与えられる。
- b) 各競技者の部分得点A（滞空）は、以下の式から算出する。

$$\text{Partial Score A} = 1000 \times P1 / Pw$$

P1 : 5.3.2.3 で計算した各競技者の得点

Pw : グループ内勝者（一位）の得点

- c) 各競技者の部分得点Bは、以下の式から算出する。

$$\text{Partial Score B} = 1000 \times D1 / Dw$$

D1 : 5.3.2.4 で計算した各競技者の得点

Dw : グループ内勝者（一位）の得点

- d) 各競技者の部分得点Cは、以下の式から算出する。

$$\text{Partial Score C} = 1000 \times T1 / Tw$$

T1 : 5.3.2.5 で計算した各競技者のタイム

Tw : グループ内勝者（一位）のタイム

#### 5.3.2.7. 総合得点

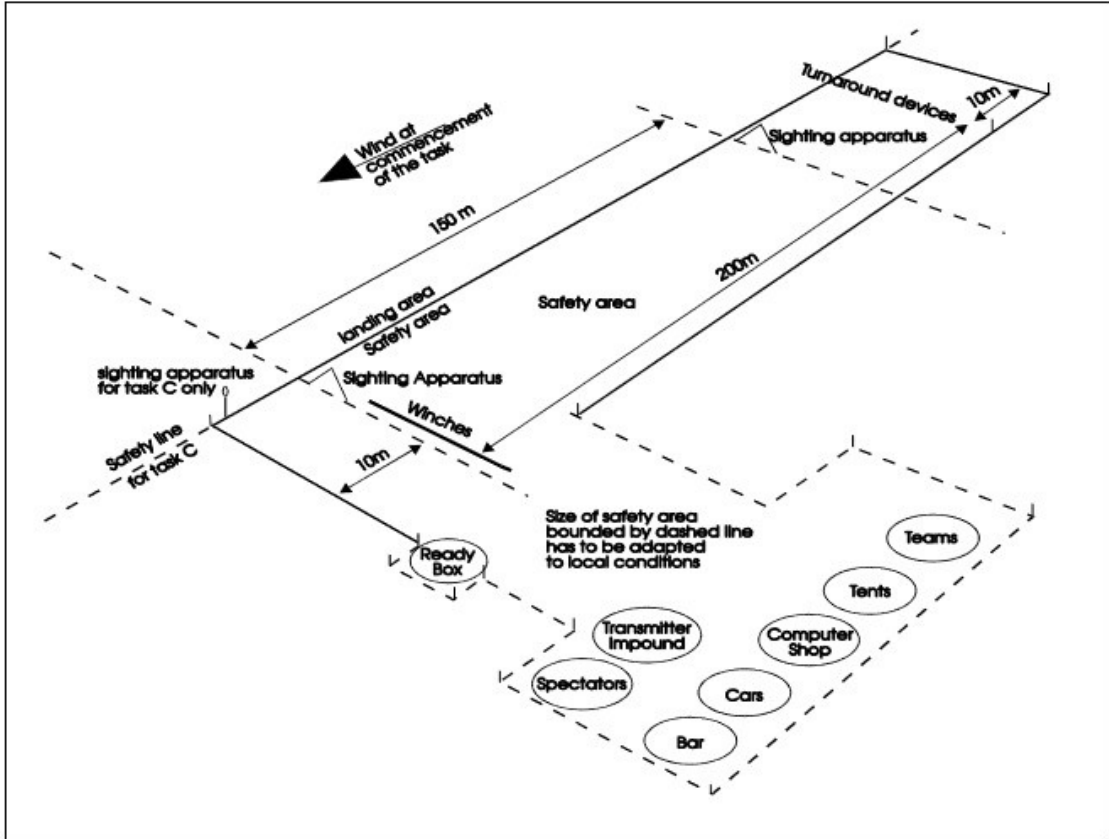
各ラウンドごとに、各競技者の部分得点A、B、Cを合計して総合得点を求める。

#### 5.3.2.8. 順位

5ラウンドのみ実施された場合は、5ラウンドすべての結果を合計して最終順位を決定する。5ラウンドより以上飛行した場合、各々のタスク内の一番低いスコアがカットされる。1位と2位が同得点の場合は、完全な1ラウンド（3タスク）を実施して勝者を決定。。

#### 5.3.2.9. 競技場

この競技は、十分に平坦で、かつスロープ・ソアリングあるいはウエーブ・ソアリングを行う可能性が十分に低い地形の場所で実施されなければならない。



F3B FLYING FIELD LAYOUT  
(left hand layout shown)